

## 伴走者としての使命感

年度末、卒業のシーズンとなりました。私自身、この一年間を振り返ると、本校の先生方と出会い、自分の未熟さと向き合いつつも、まだ成長できることへの喜びを感じています。

さて、私は高校生活を例えるならマラソンと短距離走のどちらかと問われれば、迷わず「どんなに距離が短くても、マラソンである。」と答えます。なぜなら学校生活は、生徒同士の競い合いがあったとしても、記録や順位などの速さを求めるものではないと思うからです。

実は私のある経験がこのことを強く印象付けました。今から17年前、第1回東京マラソンに運よく出られた時のことです。最後は氣力を振り絞り、フラフラになりながらも何とか設定時間内に走り終えましたが、ゴール後に掛けられる周囲の言葉で今までとは違う充実感をえました。「よく走りきれたねぇ。」「途中で諦めようと思わなかったのがすごいなぁ。」など、私への労いの言葉は全て私の心に対する評価であり、マラソンを通して知り合った仲間との会話も「完走」の体験が共通の言語になっていました。記録や順位を競うのは、一部のトップランナーに過ぎずほとんどの市民ランナーは、他人との勝負ではなく、苦しい中でも最後まで諦めずに走りきれたことへの達成感ではないでしょうか。

この経験を機に、生徒が高校生活を終えて巣立つ際、最後まで諦めなかった頑張りを褒めてあげることの大切さについて考えるようになったのです。

そんなある年のお正月、箱根駅伝出場の母校を応援に平塚まで出かけました。大学名の書かれたフラッグを持ち、我が母校の後輩の通過を待っていたところ、伴走車から聞こえてくる大きな声が耳に飛び込んできました。「いいペースだ！5キロまではこのままのテンポを保つぞ！」「さぁここからは上り坂だ、負けるなよ！腕をテンポよく、いち、に、いち、に！」「苦しいかもしれないが、ここが勝負だぞ！仲間が応援しているから頑張れ！」「強くなった、いい走りだ！」と、選手を鼓舞する監督の熱い思いは、心に語りかけているようでした。

これらの経験は、ランナーと生徒の姿を重ね合わせることで、入学（スタート）から卒業（ゴール）までの教師（監督）が果たすべき使命と責任をあらためて問うこととなり、結果や成果を求める傾向にあった自己の指導観を見直すきっかけにもなりました。

学校生活は、マラソンや駅伝同様に登り坂もあれば下り坂もある長い道のりです。走り続ける中でも、途中の樹木、電柱、橋などを日々の目標と定め、生徒の力を精一杯発揮させていくことが必要です。しかし、私のそれまでの声掛けは、指導者の立場を優先するあまり、例えるなら沿道からの応援で終わっていたことに気付かされました。生徒と同じ気持ちになってこそ通じるものがあるとするならば、生徒の頑張りを正しく評価するためにも、息遣いまでも感じ取る伴走者としての役割を担うことが使命ではないかと、この経験をもとに内省した思い出があります。

令和6年3月5日、441名の生徒が巣立ちました。本校での学校生活により、見事なまでに成長した3年生の姿は、とても遅しく見えました。式の終盤、答辞を読み終えた生徒が身体を振り返らせ、仲間や保護者、教職員への思いを壇上から「みんなありがとう、みんな大好き！」と自分の言葉で感情を伝えるサプライズがあり、教師の目が涙で溢れました。伴走者としての役割を終えた教師は、自分の力でしっかりゴールさせようと最後のコーナーを曲がった所で足を止め、花道へと生徒の背中を押す予定でした。

しかし、生徒が抱く感謝の念はゴール直前でいっぱいとなり、導くように教師の手を取りました。ランナー（生徒）と伴走者（教師）が高々と両手を挙げ、一緒にゴールのテープを切る姿は、学びの匂いとなって会場全体を感動の渦に包み込んでいました。 令和6年3月

